

Der Wind

(風)



記憶の中の箱根駅伝とベルリンマラソン

湘南日独協会名誉会長 島 新

正月の二日三日は、毎年テレビで箱根駅伝を観戦している。今年は往路の箱根上りの第五区で、青山学院大学の黒田朝日選手が驚異的な四人抜きでトップの早稲田を最後に抜き去り、往路優勝を果たし、復路も制して二回目の三年連続総合優勝を果たした。

毎年見ているのだが、見る度に様々な場所、特に箱根の上りと下りのコースで現れてくる場所には、様々な思い出が蘇ってくる。昭和24年、小学校一年生の一学期まで箱根仙石原の俵石にいた。木炭車のバスや箱根登山電車で、小田原まで往復した時に眺めた景色だ。木炭車は戦中戦後の物資不足の折に、ガソリンではなく薪を燃やしてエンジンを動かしていたバスだ。パワーがないので時々動かなくなって、乗客は下りてバスの後ろに回り、押したものだ。

その後大人になってからも、箱根には何度もバスや車で往復したので、駅伝のコースの情景はよく知っている。箱根湯本を過ぎて少し行くと、昔から変わらない、がっしりとした姿の旭橋を渡る。さらに函嶺洞門のトンネルが見えてくる。いずれも子供の頃から何度も通った所で、今は国の「土木遺産」となっている。このトンネルは、何年か前に通行禁止となり、ランナーはその脇の新しい道路、バイパスを駆け上ってゆく。画面に見えてくる度に懐かしい。



さらに行くと大平台のヘヤピンカーブが見えてくる。ここも何度も通り過ぎた所で、記憶に焼き付いている。そして懐かしい宮ノ下だ。

富士屋ホテルの200メートルほど手前の左側に、箱根登山鉄道の宮ノ下駅に通ずる坂道がある。強羅の白百合幼稚園に通うため、木炭車のバスで仙石原俵石閣前からここまで来て、電車に乗り換え強羅まで行ったものだ。

富士屋ホテルを過ぎるとすぐに三叉路になる。駅伝のコースは左に曲がるのだが、そこを曲がらずにまっすぐ行くと、子供の頃に住んでいた仙石原だ。今も度々、年に数回はこの三叉路を通って仙石原に行く。駅伝のランナーは、宮ノ下の三叉路を仙石原方面に行かず、左に曲がって上って行く。強羅、元箱根方面である。かなりの急坂だ。当時木炭車のトラックが「ウーウー」とうなりながら、まさに息切れするような感じでのぼっていくのが聞こえてきたこともある。やや緩い坂が急に急坂となるので、駅伝五区のランナーは大変だろうなあ、とトラックのうめきを思い出しながら、毎回見ている。ランナーがこの坂を上り切り、しばらく行くと小涌園前の映像が流れてくる。さらに上って行くと、箱根登山鉄道の踏切があり、ランナーはそこを走り抜けていく。この踏切も懐かしい。幼稚園の帰り、強羅駅を出発した電車がこの踏切を通ったので、良く覚えている。

上り坂が終わって芦ノ湖を見下ろしながら元箱根まで一気に、ランナーは下り坂を下りてくる。走るのも少しは楽になったのだろうと見てみると、ゴール直前の箱根関所跡の坂が待っている。なだらかで短い坂なのだが、ゴール直前なのにこれは苦しいだろうなあ、と、見ていていつも思う。

かくして今年の往路は、先頭に行く早稲田を青山学院が驚異的な走りタイムで抜き去り、18秒の差を付けて往路優勝を果たした。小田原中継所を出た時には五位で、トップの早稲田には大差をつけられていたのに、この走りは驚異的なパフォーマンスだった。只々すごい。感動した。



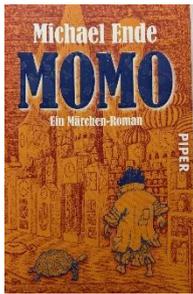
似たような感動を思い出した。ドイツに駐在していた時、2001年の事だった、何の気なしにテレビをつけるとマラソンの中継が写っていた。

ベルリンマラソンの中継だ。見ていると高橋尚子が走っていた。力強い走りだ。そして優勝した。其の一年前のシドニーオリンピックで金メダルを取っていたので、只々すごい、と感動したのを覚えている。

11月例会

講演「今、読み直すエンデの『モモ』」

講師 寺田 雄介氏 山梨大学准教授



寄稿者 常務理事 星野 諭

ドイツ語やドイツに関心のある方ならば誰でも知っているミヒャエル・エンデの『モモ』。とはいえこの童話とも寓話とも読める不思議な作品を実際に読んだという人は、そう多くないに違いない。現に私もこの講演を機に初めて自宅の「積ん読」棚から取り出して読み始めた（残念ながら原書ではなく大島かおり訳の岩波書店版）。

意外に読みやすく一氣に最後まで読み通したが、実はそこで語られている内容を理解するのはとても難しい。たとえば『モモ』第二部の最後で「どこにも無い家」の主人マイスター・ホラ（時間の神様）がモモに出した「なぞなぞ」は、時間というものの本質をえぐり出しているが、一読でこれを解ける人は少ないだろう。それはアンリ・ベルグソンの思想「純粋な現在とは、未来を喰っていく過去の捉えがたい進行である。実を言えば、あらゆる知覚とはすでに記憶なのだ（『物質と記憶』）」を想起させる。寺田先生はこうした素人には難解な『モモ』をかみくだいてわかりやすく解説してくださった。

講演の冒頭で先生は、作者エンデが生涯にわたって一貫して持ち続けていた考え方が今盛んに言われているSDG's（国連が定める持続可能な17の開発目標）に相当するものであることに言及され、続いてエンデの略歴を紹介された。エンデは少年時代にヒトラー・ユーゲントへの加入を断固拒絶し、ギムナジウム、俳優学校を経て同棲相手（後に結婚）の女優のすすめで児童文学を書き始める。これが当たって文学賞を受賞し、さらに『はてしない物語』が映画化されたおかげで先に書いていた『モモ』もベストセラーとなる。



最初の妻の死後再婚した2度目の妻は、彼の『はてしない物語』の記者である日本人女性だった。そのご縁で長野県信濃町の黒姫童話館には世界で唯一のエンデの常設展示がある。

続いて『モモ』の重要な部分を、第一部「モモとその友だち」、第二部「灰色の男たち」、第三部「<時間の花>」という作品の流れに沿って説明して頂いた。

人の話を聴く能力を持つ不思議な少女モモ。しかし彼女の周りの人たちの牧歌的な環境は、灰色の男たちがやってきて、時間を預ければあとで利子をつけて返してやるという時間どろぼうを働くことによって、ギスギスしたものに一変してしまう。



モモはマイスター・ホラの指示で動く不思議な亀カシオペイアに導かれて灰色の男たちから逃れ、彼らをやっつけて閉じ込められていた時間を皆に返し、再び世界は元へ戻る。（写真はハノーファーミヒャエル・エンデ広場にあるモモの像）

エンデの研究は日本ではとても進んでいる。1999年に放映されたNHKのドキュメンタリー「エンデの遺言」は彼のロングインタビューで構成されており、そこでエンデは自然経済と貨幣経済の乖離について言及している。

最近の研究によればエンデの作品の背景に流れる「経済効率主義否定」の考え方は、マルグリッド・ケネディ（金利制度批判、補完通貨を推奨）、シルビオ・ゲゼル（自動的に減価するスタンプ貨幣）、ルドルフ・シュタイナー（精神文化－自由、法・政治－平等、経済－友愛がそれぞれ担保）の3人の経済学者の影響を受けているとのこと。「貯めることのできるお金」と「貯めることのできない時間」の対立を作品に反映させたエンデの『モモ』は、貨幣経済と資本主義の問題点を児童文学の形で表現したものといえる。読めば読むほど深くなる、そんなエンデの作品に切り込む、とても貴重な寺田先生の講演であった。



懇親会にて 右から二人目が寺田先生

1月例会

講演「シャーロック・ホームズ魅力の世界

— そのトリックは成立するのか —

講師 田中 喜芳氏

シャーロック・ホームズ研究家
人間行動学博士



講演者 田中喜芳氏

寄稿者 会員 鈴木 洋子

「シャーロック・ホームズ」の名を目にし、早速講演に申込みました。NHKで1985年-1995年に放送されたジェレミー・ブレット主演のテレビドラマ「シャーロック・ホームズの冒険」を観続けること40年。「そのトリックは成立するのか」という演題に、どういのお話になるのか大変興味をそそられ、私の頭の中に「どうだね？ワトソン君！」という声が聞こえてきました。

シャーロック・ホームズの物語は全60編あり、聖書につぐベストセラーと言われているそうです。1887年~1927年に発表された作品が世界中で100以上の言語に翻訳され、最初に発表されてから約100年後に再度、テレビドラマのシリーズとなったことはまさにそのことを証明していると思いました。講演の休憩中に、講師の田中先生から、テレビドラマの日本での放送にあたり翻訳チェックにあられたと伺いました。緻密な背景を検証されて初めて放送されていることを知り、この先のトリックの分析にますます期待が膨らみました。

「シャーロック・ホームズ」について語るには1回の1時間半ではとうてい足りないという中で、作品の魅力、シャーロキアン、作者コナン・ドイル、ヴィクトリア時代の料理、トリック、日本での舞台劇についてお話くださいました。すべてに興味をそそられながら、とくに田中先生が実際にそのトリックが成立するかをご自身で実験されたということに感銘を受けました。

選ばれた3つの物語について、それぞれに実験された結果、そのトリックは現実的にはありえないという結論にいたったそうです。たとえば《六つのナポレオン像》では、像が乾いているところに黒真珠を入れることができないこと、また、夜に山下公園のガス灯の下での実験では、像を割ったあとに黒真珠を探すことは、ほぼ不可能であるということ。

私は、その結論に納得したと同時に、これもまた物語が提供してくれている謎解きの1つに思えて、さらにのめり込む心境にいたりしました。

「シャーロック・ホームズ」、「ドイツ」そして「日本」との関わりについてのお話もありました。第1次大戦中、徳島県鳴門市にあった「坂東俘虜収容所」で「シャーロック・ホームズ」の舞台劇を開催した記録があるとのことでした。当時、敵国の文化といえども世界に愛された物語として、坂東俘虜収容所の所長松江豊寿陸軍中佐が捕虜らの自主活動を奨励したことにより開催にいたったことを思いますと、世界が繋がっていることを深く感じました。「シャーロック・ホームズ」には、単に推理・探偵小説にはおさまらない、世界の人々を魅了する力、人間としての心をはぐくむ力があると感じました。

ロンドンの地下鉄ベーカー・ストリート駅を訪れたときの壁画にあったシャーロック・ホームズの横顔を想い、私もシャーロック・ホームズは実在した人物であると信じる（願う）ものの1人です。そしてまた霧のロンドンを訪れたいと思いました。

田中先生には、ホームズとワトソンになった気分、鹿撃帽、虫眼鏡とパイプとともにお写真を撮影してくださりありがとうございました。



講演者 田中喜芳氏と寄稿者



『ソア橋』のトリック検証実験

ブレーマーハーフェン 志賀トニオ氏

ブレーマーハーフェン歌劇場ではカルマン作曲のオペレッタ”チャルダッシュの女王”のプレミアが終わり、次の演目はベッリーニ作曲のロメオとジュリエットなのですが、この演目はコンサート形式で行われるため、11月上旬から一か月間の仕事がほぼお休みとなりました。そんな折に私の所属している音楽事務所から仕事の依頼があり、ザールブリュッケン州立歌劇場で3週間、コレペティトアとして働く事になりました。

仕事内容はミュージカル”ラカージュオフォー”の立ち稽古でピアノを弾く事でした。ザールブリュッケン州立歌劇場は日本でも馴染みの深い準メルクルさんや上岡敏行さんが音楽監督を務めた名門です。位置的にはブレーマーハーフェンから電車で7時間程の距離で、正直私に依頼があった事に驚いたのですが、これはせっかくのチャンスと思い引き受けることにしました。

早速劇場の担当者に連絡し楽譜を送ってもらう事に。仕事開始2週間前に楽譜が届き、ドキドキしながら難易度や量を確認。ザールブリュッケンの仕事が始まるまでの2週間はブレーマーハーフェンで前述のチャルダッシュの女王の立ち稽古の仕事がある為、空き時間を有効に使った練習計画を立てる必要がありました。楽譜は手書きで読みにくく、コードネームのみの箇所が多い等、即興で演奏する事が求められましたが、それらは私の得意分野で、全体的には難易度はそれ程高くなく、量的にも準備が間に合う感触を得てホッと一安心。しかし、楽譜には通常ミュージカルを上演する時に挿入してある語りの部分がなく、別冊でのテキストも同封されていませんでした。

私はオペラでもミュージカルでも必ず音楽の練習を始める前にテキストを一読し、全体像を把握するようにしています。そうする事で何の為の音楽なのか理解してから練習を始められるので、最終的に効率良くあるべき姿に近づくと考えています。特にミュージカルでは音楽とテキストのからみが重要ですので、至急担当者に連絡して電子メールで送ってもらい、ブレーマーハーフェンの劇場で冊子にしてみました。この事はつまり、ザールブリュッケンの劇場では代理のコレペティトアにテキストを読み込んで稽古に参加する事を求めている事を意味していました。ですので逆に私がこの短い準備期間で

テキストまで読み込んで曲の内容をできるだけ熟知して稽古に参加すれば、彼等からの高い評価につながるかもしれないと考えていました。

こうして課題の準備を首尾よく終えていざザールブリュッケンに向かいました。ブレーマーハーフェンからはブレーメンとマンハイムで2回乗り換え、午後7時半にザールブリュッケン中央駅に到着。徒歩5分程の用意されたホテルでチェックインを済ませ、さっそく劇場へ向かいました。その日の夜は立ち稽古がない事を事前に確認していたので稽古場を見ておきたかったのです。



ホテルから徒歩10分程で劇場に到着。とても大きい建物で楽屋口を見つけるのに四苦八苦。

ほぼ一周した所でようやく楽屋口を発見。守衛さんにゲストである事を告げいよいよ入場！稽古場は3階との事。劇場というの迷宮なのはたして自力で見つけられるかちょっと心配。そしてやや苦戦したものの無事稽古場に到着！ブレーマーハーフェンの稽古場のほぼ倍の広さ。



そして一番チェックしたかったのはピアノです。ブレーマーハーフェンの稽古場のピアノはメンテナンスがしっかりされたスタインウェイの

グランドピアノで、鍵盤のタッチも軽くとても弾きやすいのですが、他の劇場ではメンテナンスが疎かであったり、タッチが重い事や椅子の高さが調整できない事があるので、必ず初仕事前にピアノの状態を確認したかったのです。幸いピアノはカワイ製で状態は良く、タッチはやや重いものの比較的弾きやすく、椅子の高さは調整できなかったため、その部屋にある私の求める高さの椅子を見つけて準備完了！

そして翌日の朝からいよいよ仕事開始。順調に滑り出し、徐々に評価を上げている感触を感じながら最後の1週間は舞台稽古でベヒシュタインのグランドピアノを弾けて感動しました。テキストまで読み込んでいた事もとても有難がってくれて大変有意義な3週間を過ごす事ができました。

*劇場便りは当協会ホームページで連載中です。



2026年度ドイツ語講座春夏期4/4(土) 開講!

来る4/4(土)よりドイツ語講座春夏期が開講します。コースは『新・ドイツ語入門(対面・オンラインを隔週交代で計20回)』『初級後半(対面・隔週10回)』『初級後半会話(オンライン・隔週10回)』『中級Podcast(対面・隔週10回)』『中級会話(オンライン・隔週10回)』です。

基本的に前期からの継続コースですが、途中からの参加も可能です。また『初級後半』の対面授業では新しいテキストを用いた授業が始まります。是非いっしょにドイツ語を学びましょう。

会場 ミナパーク会議室(藤沢駅より徒歩5分)

「ドイツ文学を原語で楽しむ会」に参加して

会員 大久保 明

六年前の秋、当時の湘南日独協会松野会長が発案とご指導で開始した、通称「読書会」はその後多くの方にご指導を受け今日に至っています。私はドイツに勤務する機会がありましたが、新聞などを読むことはあっても、小説等の文学書を読むことは有りませんでした。

一方ヘッセ等の小説への興味は強くあり、ヘッセの生誕100年記念の主要作品を集めた八巻の文庫本「Hermann Hesse Die Romane und die grossen Erzählungen」が Suhrkamp社から1977年に出版され、買い求め1979年帰国、その後の勤務時は日本に置いたまま、やっと2019年になって、その一部をこの読書会で読むことが出来、感激しました。

読書会でこれまで取り上げた作品は以下のようになっています。私のような方もおられると思います。参加をお待ちしています。

H.Hesse: Demian, Augustus, Der Zwerg,
Das Nachtpfauenauge

T.Mann: Tonio Kröger

F.Kafka: Ein Hungerkünstler

P.Süskind: Drei Geschichten

F. von Schiller: Die Burgschaft

L.Thoma: Lausbubengeschichten

J.W.von Goethe: Die Geschichte des Marschalls
von Bassonpierre

Hugo von Hofmannstahl: Erlebnis des Marschalls
von Bassonpierre

Stefan Zweig: Die unsichtbare Sammlung, Buchmendel



午年新年会

理事 鬼久保 洋治

2026年1月25日湘南日独協会は、実(巳)のり多き年からうまく(午年)行くようにと、新年会が12名の参加で行われました。久ぶりに会う方もあり話に花が咲き健康を確認、和やかな時が過ぎました。

また例会の田中喜芳講師も参加されてシャーロックホームズそのトリックは成立するか?などの話題で盛り上がり、新鮮な新年会となりました。



☆☆☆

新入会員紹介:

福沢百合子様 矢敷 正様 神澤 隆様
竹内真知子様

寄付金を頂きました:

星野 諭様 大石則忠様 木原健次郎様

編集後記:

2025年度の最後のDer Windをお届けします。湘南日独協会の大きなイベントとしては、合唱団アムゼルが5月に本郷台駅に面したリリスホールで開催され皆さんに楽しんで頂くことが出来、舞台上立った私も久しぶりに充実感を味わいました。

ドイツ語講座の内容も新しくなり、受講生も増え楽しいクラスの賑わいが聞こえてきます。一般的にドイツ語の人气が薄れていると言われてはいますが、我々にとって重要な外国語であることは変わらないと思っています。歌う・読む・話すを生涯楽しむことが出来ると思います。仲間を増やしましょう。

新年度を迎え、湘南日独協会の運営体制も変わります。多くの皆さんの積極的な関わり合いを心よりお願いします。(大久保)

3月	見て聴いて楽しむ音楽史 (第38回) 12日(木) 14:00-16:00 ミナパーク302 会費:1,500円 演題: 美しいバロック音楽 (#3) 講師: 高橋善彦氏 (会員 湘南日独協会理事) 取り上げる曲: ヘンデル “水上の音楽”から抜粋、バッハ “ブランデンブルグ協奏曲”第5番より他	
	読書会 09日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円 23日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	談話室SAS 10日(火) 15:00-17:00 ミナパーク M2 会費:1,000円	
	SWZ 19日(木) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	ドイツ映像研究 15日(日) 14:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	講演会 22日(日) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,500円 演題: 「19世紀末のウィーンとユダヤ人」 講師: 村山雅人氏 (元國學院大學教授) 概要: 「もしユダヤ人の貢献がなかったなら、世紀末ウィーンは断片である」と言われるほど、19世紀末ウィーンの文化にユダヤ人が果たした貢献は大きかった。このユダヤ人の活躍が「反ユダヤ主義」を惹起し、そしてその反動として「政治的シオニズム」が登場する。ユダヤ人国家建設運動は、しかしユダヤ人内部で対立を生みだした。あらゆる舞台で、ユダヤ人が密接に関わって回っていたウィーン社会の実態を政治・社会的視点から紹介する。 懇親会: 有り	
4月	見て聴いて楽しむ音楽史 (第39回) 16日(木) 14:00-16:00 ミナパーク302 会費:1,500円 演題: Mozartの音楽 #4 謎の交響曲(中期の名作) 講師: 高橋善彦氏 (会員 湘南日独協会理事) 取り上げる曲: 交響曲第35番 KV385 “ハフナー”, 第36番 KV425 “リンツ”, 第38番 KV504 “ブラハ”	
	読書会 13日(月) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,000円 27日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	談話室SAS 14日(火) 15:00-17:00 ミナパーク M2 会費:1,000円	
	SWZ 16日(木) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	ドイツ映像研究 05日(日) 14:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	年次総会 26日(日) 14:00-15:00 ミナパーク505	
5月	講演会 26日(日) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,500円 演題: 「ドイツ・欧州の情勢とアメリカとの関係」 講師: 八木毅氏 (元ドイツ大使) 概要: ドイツでは昨年5月に新政権が誕生したが、内政、経済、外交で難しい課題を抱え、政権を取り巻く情勢は厳しい。特に極右の「ドイツのための選択肢(AFD)」が伸張しており、本年の州議会選挙の帰趨はドイツ政治に大きな影響を及ぼす可能性がある。欧州の主要国であるフランス、英国の内政も不安定であり、相当数の国で極右あるいは右派ポピュリストとされる勢力が伸張している。更に第二期トランプ政権の登場により貿易・経済、外交・安全保障だけでなく「文化」の面でも大きな挑戦に直面しており、対米関係は欧州の苦境を増幅している。 懇親会: 有り	
	見て聴いて楽しむ音楽史 (第40回) 14日(木) 14:00-16:00 ミナパーク302 会費:1,500円 演題: Beethovenの音楽 #4 リズムの交響曲 講師: 高橋善彦氏 (会員 湘南日独協会理事) 取り上げる曲: 交響曲第7番 A-Dur op.92 他	
	読書会 11日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円 25日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	談話室SAS 12日(火) 15:00-17:00 ミナパーク M2 会費:1,000円	
	SWZ 21日(木) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	ドイツ映像研究 10日(日) 15:00-17:30 ミナパーク506 会費:1,000円	
6月	講演会 24日(日) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,500円 演題: 「世界から見た日本」 講師: 岡田眞樹氏 (元フランクフルト総領事、他デンマーク大使など歴任) 概要: 昨今のアメリカや中国・朝鮮などの周辺国との関係、外国人問題やポップカルチャーの問題、安全保障や経済財政問題、歴史認識なども含めて、これらに関して、42年間外交官生活をしてきて外国と日本の間にいた中で、日本や日本人について感じたことをベースにお話する。 懇親会: 有り	
	見て聴いて楽しむ音楽史 (第41回) 11日(木) 14:00-16:00 ミナパーク302 会費:1,500円 演題: Tchaikovskyの音楽 講師: 高橋善彦氏 (会員 湘南日独協会理事) 取り上げる曲: 組曲くるみ割り人形(予定) 他	
	読書会 08日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円 22日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	談話室SAS 09日(火) 15:00-17:00 ミナパーク M2 会費:1,000円	
	SWZ 18日(木) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	ドイツ映像研究 14日(日) 14:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
7月	講演会 28日(日) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,500円 演題: 「ビジネスにおける通信手段の変遷」 講師: 島新氏 (湘南日独協会名誉会長) 概要: 昨今のビジネスにおける通信手段は目覚ましく変遷発展し、伝達速度は瞬時となっている。この数十年どのような変遷をたどったのか。それ以前、商業が大いに発展した江戸時代は如何であったのか。鎖国の時代であったが、米取引市場の発展が、近世で、世界で最も早く先物取引市場が発展し、それを支えた通信のスピードは我々の通念を超えたスピードであった。 懇親会: 有り	
	7月の行事は項目のみ記載、詳細は6月に発行予定の次号に掲載予定	
	見て聴いて楽しむ音楽史 (7月、8月は休会の予定)	
	読書会 13日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円 27日(月) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
	談話室SAS 14日(火) 15:00-17:00 ミナパーク M2 会費:1,000円	
	SWZ 16日(木) 15:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円	
ドイツ映像研究 12日(日) 14:00-17:00 ミナパーク506 会費:1,000円		
講演会 26日(日) 15:00-17:00 ミナパーク505 会費:1,500円		

参加される皆様へ 準備の都合上、早めにお申込ください。

各催しは変更される場合があります 最新の予定を当協会のホームページでご確認ください。

URL : <https://jdg-shonan.ciao.jp/> 右記のQRコードからもアクセス出来ます。

